【228】

氏　名（本籍）	神林菜穂子（かんばやし なほこ）（東京都）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 3488 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	**物語絵巻における和歌景物の研究** －国宝源氏物語絵巻・久保惣本伊勢物語絵巻を中心に－

主　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	五十殿利治
副　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	東京大学教授	文学修士	河野元昭

論文の内容の要旨

本論文は我が国の代表的な物語絵巻である国宝源氏物語絵巻ならびに伊勢物語について，とくに和歌が絵巻制作に大きく関与していると推論し，その作風が成立した背景を題材である物語の構造と制作基盤であった王朝貴族の文化土壌との二方向から考察している。

第一章では，平安時代における和歌の作法，贈答歌の表現構造，源氏物語において発揮される贈答歌の表現性と，絵巻の題材となった源氏物語の背景をいくつかの段階に分けて整理した。特に和歌の贈答歌が持つ二重構造は，国文学者の鈴木日出男氏の説を援用し，源氏物語絵巻には贈答歌が意識的に用いられ，画中に景物として描かれることにおいて，人物の情感，心のうちを暗示させる重要な機能を果たしていると解釈した。

第二章では，この和歌の表現が，絵巻に，具体的にはどのように描かれているかを個々の絵に即して考察した。注目されるのは和歌の景物の性質である。とくに「御法」の秋草の露が，物語中の和歌を媒介に，様々な暗喩として機能していることは，周知の事実である。しかし従来は「御法」に見られる高度な表現を，柏木グループという制作者の技量に求めることが多かった。本稿では，このような方法が，内容の差はあれ，国宝源氏物語絵巻全体に渡って見出せることを指摘し，個人の表現力ではなく和歌を重んじた貴族社会において形成されてきた表現であると結論付けた。

第三章では，第一章や第二章の補足として，和歌に依拠しない国宝源氏物語絵巻の表現方法を考察した。取り上げた「横笛」「夕霧」「東屋一」は，和歌と関係しない場面である。この三図では，人物の移動を示す障子や，人物の動作を暗示する机などを用いることによって，物語の前後の内容を画面に示している。「横笛」や「夕霧」は，柏木グループの中でも新しい表現を狙った画面と言われるが，そこには一場面に収まりきれないほどの情報量を，やはり暗示という形で盛り込んでいる。物語の中の長い時間を，調度などによって示す方法は，和歌の景物に人間関係を象徴させる手法とよく似ていることを指摘した。

第四章では，現存する伊勢物語絵巻の中で，最も古風な表現を伝える久保惣本伊勢物語絵巻をとりあげ，物語本文との関係や，表現の特色を考察した。現存する七図の構図はどれも人物と景物という組み合わせからなり，国宝源氏物語絵巻と同じ系譜にある。しかしながら，自然景の広やかな描写には，伝統的な伊勢物

語絵の図様と異なる季節が取り入れられており，「河内越」を取り上げ，物語本文と比較し，新たに加えられた景物が登場人物の心情や制作者の解釈の反映と解釈し，制作する側の自立的な意図を見出している。

第五章は，久保惣本伊勢物語絵巻の系譜にある唯一残された色紙の模本（東京国立博物館所蔵）を久保惣本伊勢物語絵巻と比較し，その表現の違いを考察した。模本の奥書には天保七年と記載があり，ここから久保惣本の系統に連なる伊勢物語絵が，脈々と人の目に触れて，描き継がれていたことが明らかとなった。

結語では各章での考察を総括し，物語絵巻における和歌の景物は，単なる舞台背景ではなく，登場人物のこまやかな心情などを象徴するという役割があったことを結論付けている。また和歌景物の研究は，やまと絵全般の自然把握の方法を見直す視点にもなり，例えば花弁を散らす桜など，時代を通じて見られる日本美術の様式化された自然風物の表現が背景に和歌的な観念が強く働いていたと解釈する独自の研究手法を見出した。

審査の結果の要旨

本研究はこれまでの物語絵の解釈で十分解明できなかった和歌景物を，国宝源氏物語絵巻，ならびに久保惣本伊勢物語絵巻にあたり，画中に描かれた，景物にあたる表現を丹念に確認し，その描かれた意味について考察したものである。物語の単なる叙述を絵画化したものでなく，和歌が登場人物の心情を映し出す重要な機能を果たし，絵巻中の景物として描かれていることを指摘した。

これまでの物語絵の研究は我が国の絵画表現として，やまと絵の傑作という位置づけがなされ，またそのつくり絵としての表現，我が国ならではの吹き抜き屋台，引目鉤鼻などによって評価してきた。しかし物語絵巻における「もののあはれ」の情景については絵画表現の上から十分に指摘がなされてきたわけではなかった。和歌が機能していることは言われてはきたが，物語本文の和歌，その季語にあたり，それがどのような形で絵巻の中に描かれているかを，その両者の関係において十分に示して来たわけではない。本研究は和歌の構造を吟味し，景物として絵巻の中でどのように描かれたかを，物語本文と絵を対応させて吟味し，和歌の機能を明快に指摘した点で大いに評価できるものである。

著者は和歌を前面に描き出した作例として「御法」「宿木三」を挙げる。ここでは景物が大きく描かれているほか，全体が景物と和歌を詠みあう人物という要素のみで構成されている。他の場面においても景物を配するほか，登場人物たちの中で和歌の詠み手とそうでない者とを明確に区別した表現が見られ，物語の状況に対応して和歌の詠み手の閉じられた心のうちを視覚化している。物語舞台の雰囲気を表す小道具に過ぎないと思われがちな自然景の多くは，それぞれ詞書に選択された和歌の景物であり，絵に持ち込むことによって，景物に託された詠みあう登場人物の心情や交流を重層的に表現したものであると詳細に検討し結論を得たのであった。個々の場面では二義的と見られがちな自然景は，和歌の景物と重なり，画面において重要な意義を担っており，このような高度な象徴表現は，この絵巻の制作者によって急に生みだされたものとは考えられないとし，和歌を重んじる物語絵一般の表現法と鑑賞法を土台にして，物語の内容を反映させた結果，絵巻の表現は単純な構成と高度な象徴性がここに結びついたものと結論を得たのであった。

以上，本論文は著者独自の視点に立ち，従来の美術史では十分に吟味し，解釈を行って来なかった細部にわたる和歌景物の表現，ならびに物語本文の入念な解読によって美術史研究としては文学をめぐる新たな解釈，将来学説となるべき高い可能性が指摘できる。このことは和歌とやまと絵の相互の関係について，古典絵画ばかりでなく，たとえば江戸琳派の解釈にも有用であり，新たな研究視点を拓いた点は大いに評価できる。さらに調査研究を進めて研究史料の多くにあたり，日本美術史研究に大いに貢献することが期待される。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。